

母性看護実習を受講する学生の対児感情の変化と特徴

濱 耕 子¹

Abstract

I held a survey among 56 young nursing students taking a class in maternity nursing, using the Feelings Towards Infants Evaluation Index, in order to grasp insights on how to foster students' maternity awareness.

Through the practice classes, I saw a distinctive change in the students' approach and evasion feelings, and found there was a correlation with the students' characters.

The approach feelings index of all subjects was higher than that of other unmarried college students, before and after the practice classes, and the evasion feelings went from higher to a comparable level. Maternity care students whose feelings towards infants were low, rose after practice lessons to the level other students. The evasion feelings index of students whose evasion feelings were high before, went down, but that of students with a low index, rose. Students with more exposure to children until high school days tended to show more evasion feelings after classes.

The effect of a rise in feelings toward infants after practice for those with a low index was thus shown. Furthermore, because the amount of experience with children influences the change in evasion feelings, it is important for the practice class conditions to know what experiences the students have had with children.

Key Words: Maternity care practice class, youth, nursing students, change of feelings toward infants

I. 緒 言

わが国の合計特殊出生率は今や 1.25¹⁾であり、少子化が進行するなかで、地域社会においても母親や子どもと接する機会は困難な状況にある。看護学生の大半は青年期に属しているため、基礎教育における母性看護の修得の機会には看護の対象への看護実践能力を養うことと同時に、学生が自らの母性を深く見つめ、母性として成長・成熟する^{2)~4)}過程を経験するともいわれる。その内容としては、母性意識と関連する因子について報告されており、看護学生の母性性の構成因子には子どもを肯定する感情が掲げられていたこと⁵⁾や、乳幼児と触れ合った経験のある学生の、子どもへの肯定的な感情を示した割合が有意に高いこと^{5)~7)}等がある。また、学生の対児感情からみて母性意識の発達には母性看護実習が良い影響を及ぼしたとの報告も多い^{2)~4) 8)~10)}ことから、一般に教育の立場からは子どもとの接触や実習経験により学生の母性意識が発達して

いくことと認識されている。

一方で、看護教育カリキュラムの変更に伴い実習期間が短縮されることに関連して、看護学生のもつ実習後の子どもに対する接近感情は低下し、回避感情は高まったこと³⁾や、実習前後の接近感情の変化が少なく回避感情が高まる傾向¹⁰⁾などが報告されている。これらの報告から実習環境や教育上の制限による、学生の母性意識の発達に相反する影響が窺われる。本研究対象の行った母性看護実習期間の内訳は、臨地で実習に費やす期間が8日、学内実習が2日であった。本研究の学生の場合も実習の対象となる子どもの特徴を十分に理解するには短い期間で実習にあたっている。

このように子どもと接する機会や実習機会の制限が否めない現状においては、実習前後で現われた学生の母性意識の特徴を把握することにより、学生のもつ母性性の発達課題に関する効果的な対応を見出すことが必要ではないかと考えた。そこで本研究では、学生のもつ属性や対児感情の水準の違いにより、母性看護実

1 三重大学医学部看護学科母子看護学講座

習後に対児感情がどのように変化していくのかを調査し、実習に臨む看護学生の母性意識を高めるための援助のあり方を検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

対象は、A 大学看護学科 3 年次生 60 名から既婚者および男子学生を除く 56 名のうち、実習前後の接近、回避感情のいずれかの変化が有効回答であった 39 名 (69.6%) を分析対象とした。

2. 操作的定義

- 1) 対児感情：母性看護にて修得する出産期から産褥・育児期の対象（産褥婦、胎児や新生児）の理解と対象に必要な看護や保健、保育についての学習時あるいは学習期間に現われる母性意識を代表する子どもに対する感情を、接近・回避の方向から問う指標。
- 2) 実習前の調査：沐浴演習日の演習が終了した時点。
- 3) 実習終了後の調査：実習最終日の実習が終了した時点。

3. 調査期間と調査方法

平成 13 年 6 月から平成 14 年 2 月までに、対象の属性（弟妹の有無、子ども好きか否か、大学入学までの乳児接触体験、母親からの養育に関し肯定感情を持つか否か）と対児感情を調査項目とする質問紙法を実施した。乳児接触体験については、花沢の乳児接触体験質問紙⁶⁾を用い、15 項目の体験の有無を各々 1 点、0 点とし、合計点数を算出した。花沢の対児感情評定尺度¹¹⁾の接近感情と回避感情の各々 14 項目について、「非常にそう思う」を 3 点、「そう思う」を 2 点、「少しそう思う」を 1 点、「そう思わない」を 0 点とし、得点を算出した。調査は実習前に実施し、対児感情についてはその変化を知るため実習終了後も実施した。

実習前の各対児感情の平均値を境とし、対児感情得点が実習前後で上昇、低下いずれかの変化であったかを調べ、対象を接近上昇群と接近低下群、回避上昇群と回避低下群に分けた。実習前後の各対児感情の平均値を一般の値（花沢の 24 歳以下の未婚大学生の得点¹²⁾と比較した。次に実習後の各対児感情得点を群別に比較した。最後に各対児感情の上昇低下の変化に関連する学生の属性について検討した。

4. 分析

まず、対象の属性に関して度数分布を出し、対児感情得点については平均値を集計した。一般値¹²⁾との比

較に際し、1 サンプルの t 検定を行った。各対児感情の変化については対応のある t 検定を、実習後の対児感情の値の比較には独立した 2 群の t 検定を実施した。

各対児感情の上昇低下の変化に対し、弟妹の有無、子ども好きか否か、大学入学までの乳児接触体験の平均値による高低（回帰分析では乳児接触体験点数）、母親からの養育に関し肯定感情を持つか否かを独立変数として、独立性の検定（ χ^2 検定または Fisher の直接確率法）および二項ロジスティック回帰分析を実施した。統計学的解析は全て、統計パッケージ SPSS11.5J を使用した。各検定における有意水準は 5 %とした。

5. 倫理的配慮

研究への協力依頼は初回の調査時に口頭と書面にて行い、承諾を得た。調査の回答は全て無記名でよいこと、回答内容は学術的な資料以外に用いないことを説明した。また調査用紙は一対象 1 組とし、これに対象者自身で任意の記号を付記してもらうことにより、調査の各段階におけるデータのマッチングが可能な状況にした。

III. 結果

1. 対象の属性

対象の背景は、弟妹のいる者は 26 名 (66.7%)、いない者は 13 名 (33.3%) であった。子ども好きか否

表 1：対象の大学入学以前の乳児接触体験内容

表内は人数 (%)

	あり	なし
体にさわったこと	33 (84.6)	6 (13.4)
抱っこしたこと	28 (71.8)	11 (28.2)
着物を着せ替えたこと	10 (25.6)	29 (74.4)
お風呂に入れたこと	5 (12.8)	34 (87.2)
おんぶをしたこと	14 (35.9)	25 (64.1)
ほほずりやキスをしたこと	15 (38.5)	24 (61.5)
おもちゃで遊んだこと	24 (61.5)	15 (38.5)
添い寝をしたこと	13 (33.3)	26 (66.7)
おむつを洗濯したこと	1 (2.6)	38 (97.4)
おむつを換えたこと	9 (23.1)	30 (76.9)
あやしたこと	24 (61.5)	15 (38.5)
ミルクを飲ませたこと	12 (30.8)	27 (69.2)
ミルクをつくったこと	3 (7.7)	36 (92.3)
手を握ったこと	30 (76.9)	9 (23.1)
「いないいないばー」をしたこと	24 (61.5)	15 (38.5)

表 2；各学習段階における対児感情得点

表内の数字は平均値±標準偏差（点）

	実習前 (沐浴演習時)	実習後	花沢の得点	t 値 (段階順)	検 定
接近項目得点					
実習で上昇 (接近上昇群, n=12)	31.9±5.66	35.8±6.53	24.6	t= 4.48, t=5.91	両段階とも p<0.01
実習で低下 (接近低下群, n=24)	36.2±3.95	32.2±5.43	24.6	t=14.42, t=6.83	両段階とも p<0.01
回避項目得点					
実習で低下 (回避低下群, n=25)	11.8±4.77	7.4±4.12	9	t=2.94, t=-1.81	実習前 p<0.01, 実習後 P=0.07
実習で上昇 (回避上昇群, n=11)	8.4±5.12	10.8±4.42	9	t=-0.41, t=1.36	実習前 p=0.69, 実習後 P=0.20

1 サンプルの t 検定, 無回答者は除く

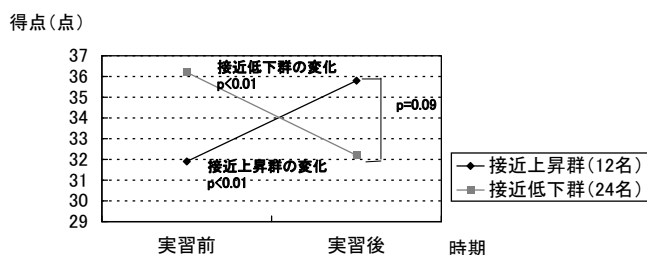


図 1：接近感情得点の変化

対応のある t 検定, 無回答者は除く

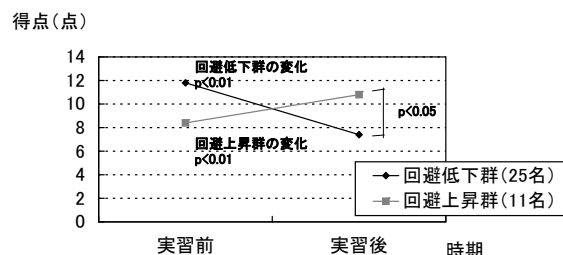


図 2：回避感情得点の変化

対応のある t 検定, 無回答者は除く

かについては、好きと回答した者は 6 名 (15.4%)、大変好きと回答した者は 33 名 (84.6%)、好きではないという者はいなかった。大学入学までに乳児と接触した体験がある者は 35 名 (89.7%) であり、大半の学生が子どもに「触る」「手を握る」「抱っこ」の体験が多く、「おむつの洗濯」「ミルクをつくる」「お風呂に入れる」などの体験は少なかった (表 1)。乳児接触体験点数は 15 点満点の平均 6.3±4.23 点であり、平均より高い者は 17 名 (43.6%)、低い者は 22 名 (56.4%) であった。母親からの養育に関し肯定感情を持つ者は 26 名 (66.7%)、持たない者は 1 名 (2.6%)、不明 12 名 (30.8%) であった。

講義等の進捗については、母性・小児看護に関連した講義 (看護学概論と各論) は全て修了し、小児看護実習を修了した学生と未修了の学生は各々 11 名 (35.9%) であり、その他 17 名 (28.2%) は不明であった。

2. 上昇低下群別にみた対児感情得点と一般値との比較 (表 2)

接近感情得点は接近上昇群、接近低下群の順に、実習前 31.9±5.66 点、36.2±3.95 点、実習後 35.8±6.53 点、32.2±5.43 点であった。接近上昇群、接近低下群の得点は、全て花沢の未婚大学生 20~24 歳のとる値の 24.6 点¹²⁾よりも高かった (p<0.01)。回避感情得点

は回避低下群、回避上昇群の順に、実習前 11.8±4.77 点、8.4±5.12 点、実習後 7.4±4.12 点、10.8±4.42 点であった。回避低下群については実習前の得点は花沢の値の 9.0 点¹²⁾より高く (p<0.01)、実習後の得点とは差がなかった。回避上昇群の得点は実習前後とも花沢の値とは差がなかった。

3. 上昇低下群別にみた実習前後における対児感情得点の変化と実習後の得点の比較

接近上昇群は 12 名 (33.3%) であり、実習前後にかけてその接近感情得点は 31.9±5.66 点から 35.8±6.54 点と高くなった (図 1, p<0.01)。接近低下群は 24 名 (66.7%) であり、36.2±3.95 点から 32.2±5.43 点と低くなった (図 1, p<0.01)。接近上昇群と接近低下群の実習後の接近感情得点は 35.8±6.54 点、32.2±5.43 点と差がなかった (図 1)。

一方、回避低下群は 25 名 (69.4%) であり、回避感情得点は 11.8±4.77 点から 7.4±4.12 点と低くなった (図 2, p<0.01)。回避上昇群は 11 名 (30.6%) であり、8.4±5.12 点から 10.8±4.42 点と高くなった (図 2, p<0.01)。回避低下群と回避上昇群の実習後の回避感情得点は 7.4±4.12 点、10.8±4.42 点と回避低下群が低かった (図 2, p<0.05)。

表 3；実習前後の回避感情得点の変化と学生の背景

表内は人数 (%)

回 避 感 情	実習で上昇	実習で低下	合 計	
弟妹あり	3 (25.0)	9 (75.0)	12 (100.0)	$\chi^2=0.26, p=0.72$
弟妹なし	8 (33.3)	16 (66.7)	24 (100.0)	
合 計	11 (30.6)	25 (69.4)	36 (100.0)	
子ども好き	3 (50.0)	3 (50.0)	6 (100.0)	$\chi^2=1.28, p=0.34$
大変子ども好き	8 (26.7)	22 (73.3)	30 (100.0)	
合 計	11 (30.6)	25 (69.4)	36 (100.0)	
乳児接触体験点数低値	3 (15.8)	16 (84.2)	19 (100.0)	$\chi^2=4.13, p<0.05$
乳児接触体験点数高値	8 (47.1)	9 (52.9)	17 (100.0)	
合 計	11 (100.0)	25 (100.0)	36 (100.0)	
母親の養育に肯定感情あり	8 (33.3)	16 (66.7)	24 (100.0)	$\chi^2=0.49, p=0.68$
母親の養育に肯定感情なし	0 (0.0)	1 (100.0)	1 (100.0)	
合 計	8 (100.0)	17 (100.0)	25 (100.0)	

Fisher の直接確率法，無回答者は除く

表 4；回避感情得点の変化を予測する因子

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	Exp (B)
弟妹の存在；いる	9.209	54.714	0.028	1.000	0.866	9988.259
子ども好き；非常に好き	-1.486	1.530	0.943	1.000	0.332	0.226
幼少期の母親への感情；肯定	-6.748	164.271	0.002	1.000	0.967	0.001
乳児接触体験得点	-0.409	0.205	3.984	1.000	0.046	0.664
定数	10.612	164.261	0.004	1.000	0.948	40627.545

二項ロジスティック回帰分析（強制投入法） Nagelkerke R 2 乗（重相関係数）=0.611 n=25，無回答者は除く

4. 対児感情得点の変化と属性の関連

対象の属性のうち，弟妹の有無，子ども好きか否か，大学入学までの乳児接触体験の平均値による高低，幼少期の母親からの養育に関し肯定感情を持つか否かについて，各対児感情の変化との関連を検討した。その結果，大学入学までの乳児接触体験が高かった学生は実習前後にかけて回避感情が高まっており（表 3， $p<0.05$ ）その他の属性とは関連がなかった。接近感情の変化にはどの属性とも関連が認められなかった。

また，これらの属性が実習前後の回避感情の変化に関わる予測因子となるか否かを検討した。このとき，弟妹の有無，子ども好きか否か，大学入学までの乳児接触体験点数，幼少期の母親からの養育に関し肯定感情を持つか否かを独立変数とし，実習前後の回避感情得点の上昇低下を従属変数とした（各々のカテゴリ変数は 0, 1）。その結果，大学入学までの乳児接触体験点数が高い者ほど，回避感情得点が高まっていた（表 4， $p<0.05$ ）。

IV 考 察

今回，青年期の学生を対象に，母性看護実習前後をとおし対児感情の変化を分析した。その結果，実習前に接近感情得点の低かった学生は 33.3%であり，実習後には実習前と比較し接近感情得点は上昇した。実習後の接近感情得点は他の学生の得点と同程度となった。このことから接近感情が低い学生にとって，実習が接近感情を高める機会になり得ると考えられた。一方，他の学生は実習前後で接近感情得点が増しなかった。しかし，得点が高まった学生もそうでなかった者も，実習前後双方の接近感情得点は花沢の未婚大学生 20～24 歳のとる値 (24.6)¹²⁾よりも高い水準を保った。今回の学生が臨んだ母性看護実習の目標には褥婦と新生児を対象に看護過程を展開する事以外に，自己の母性・父性意識の理解と発展について掲げられている。学生は青年期に属しており自らの母性意識の育成上の課題をもつ^{2)~4)}ために，接近感情を高い水準で保ちながら実習に臨んでいたと考える。青年期の母性意識には幼い子との接触，幼少期の養育経験との関連¹³⁾につ

いて報告されているが、今回の接近感情の変化には学生の属性（接触体験や子ども好き、被養育体験等）の影響がなかった。対象の学生は過去の体験や認識に関わらず、沐浴演習時から実習までの体験をとおし子どもへの接近感情を高め、保持していたものと推察される。

一方で回避感情の変化については接近感情とは異なっていた。学生の69.4%は回避感情得点を低下させていたが、30.6%の学生は子どもへの回避感情得点をむしろ上昇させていた。得点の低下した学生は実習前には花沢の未婚大学生20～24歳のとる値(9.0)¹²⁾より回避感情得点が高かったが、実習後には同水準となっていた。また、上昇した群の値と比較して実習後には低い得点となった。このように、実習の機会により大半の学生は回避感情が低くなるなかで、回避感情が上昇する学生の存在も確認された。この現象については、以下のように考えられた。

実習のなかで学生が子どもにもつ感情をどのように発達させているかについては、学習形態や学生の属性上、母性看護の対象の健康状態、また子どもとの遊びの体験と世話や養護体験との違い等、子どもとの接触体験の質により学生の子どもの対する感情は異なってくると考える。そのため、実習中に学生がもつ子どもへの感情には子どもの母親をはじめとして実習環境の影響があることを良くも悪くも否定できない。実習への参加は看護の対象として母子双方に会い関わっていくことであり、学生のなかには現実的に子どもを扱うことの大変さや母親との関わりの難しさを知り、回避感情を高める者もあったと考える。

古谷らの調査¹⁴⁾においても、実習での学生の子どもの対するイメージは肯定的にも否定的にも変化し、子どもとの関わりの困難さについては否定的なイメージを生起させる要因として挙げていた。このような見方から必ずしも、実習を行うことで全学生のもつ子どもの感情に良い影響が得られるとはいえない。

そこで回避感情の変化と属性の関連を分析すると、大学入学までの子どもとの接触体験の程度が高い学生ほど実習前の回避感情は低く、実習後には高まったことが明らかとなった。実際に大学入学までの子どもとの接触体験の程度が高い学生は、「触る」、「抱っこ」等には7～8割の体験があった。実習前つまり沐浴演習では子どものケアの方法論を学ぶ段階にある。彼等はおそらく子どもの接触そのものに慣れており、演習の段階では接触体験の程度の低い学生に比べ子どもへの否定感情は少なくなったと考えた。一方で、学生の個々がどのような体験をしたかは今回把握できなかったが、実習の場では子どもの欲求により「触る」、「抱っ

こ」などの対応を考えたり、子どもの生活に合わせた養育（「オムツ交換」、「ミルクをつくる」など）を経験する機会があったことが推察される。つまり、実習前に比べて実習での子どもの関わる体験内容は多岐に亘ることや接触した際に子ども独自の反応が伴うこと等を考えれば、学生の実習中の子どもの対する回避感情は高まることが予想された。このように回避感情については実習時に高まる者が存在することと、学習体験の影響により容易に上昇することが推察された。そのため、母性看護の学習段階の早期から過去の子どもの体験を知り、子どもにどのような感情を持つかを把握することが必要であると考えられる。また、実習の過程で子どもへの関わりが学生にとってどのような体験となっていたかを理解することが学生の母性意識を高めるための重要な援助であると考えられた。

V. 結 論

本研究では、母性看護実習前後の学生のもつ対児感情の変化の特徴を明らかにすることで、学生の母性意識を高めるための援助のあり方について検討を試みた。

その結果、母性看護実習前後において子どもに対する接近感情は高く保たれたが、回避感情は必ずしも低下しなかった。また、過去の子どもの接触体験が高い者ほど実習後の回避感情は上昇した。このように回避感情には、実習の経験が必ずしも良い影響を及ぼしていなかった。学生の属性との関連で、過去に子どもとの接触体験が多い者は実習後に回避感情を高めることが推察されたために実習という環境下では、特に子どもへの関わりが学生にとってどのような体験となっていたかを理解することが重要である。

今後は対象数を増し、実習環境や実習における学生の体験内容を明らかにすることにより、学生の対児感情への影響についてさらに検討を重ねていきたい。

謝 辞

調査にご協力いただきました看護学生の皆様に深謝申し上げます。

文 献

- 1) <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai05/dl/gaikyou.pdf> 平成17年人口動態統計月報年計(概数)の概況, 6-7, 2006
- 2) 伊藤道子: 母性看護実習が看護学生の母性意識の発達に与える影響, 母性衛生, 38 (1), 25-33, 1997

- 3) 大槻優子, 東 亜紀, 野田洋子: 女子看護学生の母性意識と母性看護学学習との関連, 順天堂医療短期大学紀要, 14巻, 65-74, 2003
- 4) 杉原喜代美, 石黒久美: 教育課程が看護学生の母性意識に及ぼす影響, ヘルスサイエンス研究, 7 (1), 23-30, 2003
- 5) 竹ノ上ケイ子, 内海滉: 看護学生の母性性の発達に関する研究 (1), 日本看護研究学会雑誌, 13 (4), 35-46, 1990
- 6) 花沢成一: 母性心理学 第一版, 医学書院, 東京, 79-85, 1992
- 7) 石松直子, 江藤節代, 山本捷子: 大学生の持つ育児イメージと対児感情-看護学科学生と他学科学生との比較-, 日本赤十字九州国際看護大学intramural research report (2), 145-154, 2004
- 8) 和田佳子, 大久保明子: 母性および小児看護学実習における看護学生の対児感情の変化, 新潟県立看護短期大学紀要, 第8巻, 11-16, 2002
- 9) 槇原文枝, 岡部恵子: 新生児との接触体験が対児感情に与える影響-母性看護学実習前後の対児感情の比較を通して-, 母性衛生, 42 (3), 315, 2001
- 10) 野口純子, 竹内美由紀, 榮玲子, 他: 看護学生の母性意識の変化と母性看護学における教育方法との関連, 母性衛生, 41 (3), 128, 2000
- 11) 前掲8) 67
- 12) 前掲8) 73
- 13) 松岡治子, 和田佳子, 花沢成一: 青年期男女における母性度・父性度の発達に関連する要因の検討 親性準備性の研究 (II), 母性衛生, 41 (4), 500-505, 2000
- 14) 古谷佳由理, 内田雅代, 兼松百合子, 他: 小児病棟実習前後における学生のこどもに対するイメージの変化について-受け持ち患児の年齢, 実習病院, 学生の不安・認識の違いより-, 千葉大学看護学部紀要, 17, 97-104, 1995

要 旨

看護学生の母性意識を高めるための援助の視点について検討する目的で, 母性看護実習を受講する青年期の看護学生56名を対象とし, 対児感情評定尺度を用い調査を実施した。

その結果, 実習をとおして学生の接近感情, 回避感情には特徴的な変化が現われており, 学生の属性との関連も認められた。

全対象の接近感情は一般の未婚大学生に比べて実習前後とも高く, 回避感情は高い水準から同程度となった。各対児感情の変化は, 実習前に低かった学生の接近感情は実習後に高まり, 他の学生と同水準となった。実習前に高かった学生の回避感情は低下し, 低かった学生では反対に高まった。大学入学までに子どもと多く接触していた学生は, 実習後に回避傾向となっていた。

このように低い対児感情をもつ者では実習後に対児感情が高まる効果が認められた。また, 子どもとの接触体験の程度が回避感情の変化に影響していたため, 実習という環境において子どもへの関わりが学生にとってどのような体験となっていたかを理解することが重要である。

キーワード: 母性看護実習, 青年期, 看護学生, 対児感情の変化